

# 高校3年

## 「自立を求めて・進路を決める」

中 村 明 彦・田 中 裕 巳・原 英 俊  
鈴 木 克 彦・横 地 武・福 谷 敏

### 1. 学年テーマについて

平成元年から開始された学校改革の当初、各学年の教科指導と教科外指導を有機的に結びつけるために学年テーマの設定が話題になった。ところが研究委員会から出された学年テーマは、「あまりに社会科寄り」、「担任の負担増」などを理由に、結局支持をえられなかった。高3には「自分史・職業」、「生き方を探る」などのテーマが想定されていたが、高3だけは例外として学年テーマは設定せず、受験勉強に邁進させた方がよいなどの意見も当時は出された。

平成7年度の研究開発「総合人間科」の開始に当たっては、全校的に取り組むために、高3は“例外”とすませる訳には行かない。確かに高3の生徒たちにとっては、単年度のみの実践ということになるが、彼らにとってもプラスになるような形で総合人間科の授業を創出したい、というのが担任団の思いであった。また初年度の高3の実践がさまざまな角度で検討され、2年目、3年目の実践の上台となって改善されて行けはよいと考えた。

高3担任団6名で最初に確認したことは、総合人間科の授業を進路指導の一環として位置付け、分掌・教科にかかわらず全員で取り組もうということであった。校務分掌としての進路部に属する教官が1名担任団にいたが、実力テスト、センターテスト、進学説明会などの全体的な調整連絡という実務的な仕事をしてもらい、真の意味での進路指導は全員で系統的・組織的に取り組むことをめざした。

研究開発校の指定を受ける前から、本校は大試制度改革にともなう学校改革に着手していた。「国際理解と平和の教育」が教育目標として掲げられ実践されていた。現高3の生徒たちは、中学入学の時点からこの高中にあった学年であり、6年間ないし3年間（高校からの入学者）の附属学校での教育の成果、影響力が測られるという意味も既に持っていた。「国際理解と平和の教育」を掲げられた教育を受けてきた生徒たちが、どのような進路観をもち進路選択をして行くのかという観点からも、高3の「総合人間科」は注目され

るところであった。

以上のような経緯で、高3の学年テーマは、「進路指導」を中心とすることになった。当初は、以下に述べるような自分史を中心とした「自分史と進路」が学年テーマであったが、11月の本校の中等教育研究協議会に向けて、「自立を求めて・進路を決める」に最終的に落ち着いた。

従来からの本校の進路指導は、高1での進路適性検査の受験、秋の高2からの文系・理系選択科目決定のための指導、高2での大学受験へ向けての講演（大学受験予備校からの講師が多い）、高2から高3にかけての担任による個別の進路相談、高3での進路に向けての合同LTがメインであった。大学受験や就職の動向を知らせ、早めに準備をさせるという一般的な指導であったと思う。言ってみれば、授業は授業であり、進学・就職の準備は生徒一人一人の自主性に期待するといった、伝統的な指導方法であった。

これに対して、「国際理解と平和の教育」では、生徒一人一人に中学・高校で学ぶことの意味を考えさせ、教科の学習だけでなく、教科外の活動にも積極的に取り組むことによって、学習意欲を喚起し、主体的に生きて行く力の獲得をめざしている。この「国際理解と平和の教育」の最終学年として今までの学習や活動の積み重ねの上に、自己の進路や職業を見つめさせようとした。そして、すべての進路や職業がとこかで「国際理解と平和」に結びついていること、そして一つの職業選択は、ある程度の他の職業選択の断念であることを理解させ、他者・仲間の進路選択にも共感的な態度で臨むことを期待した。

進路指導が、個人の成績や家庭の事情などを背景として、私事に関わる個別・秘密の指導であるという限界・自己規制を打ち破り、自分の進路選択・職業選択に誇りを持たせることが必要であると考えた。進路指導が個人の成績や家庭の事情などを背景として、とかく「あきらめさせる」指導になりやすいのに対して、夢＝自分に対する誇りと自信を回復させ、最大限の努力の大切さを教え、それを援助して行くような進路指導が必要であると考えた。

「自立を求めて・進路を決める」というテーマのもとに、最終的には「自分史と進路」というスピーチと論文を求めたのは、以上の理由からである。

## 2. 学習方法と指導体制について

本年度高校3年にとっては、高校3年生で新しく総合人間科という時間が設けられ、実質では4月からの7ヶ月間の取り組みであって、高校3年間の総合人間科の集大成としての発表ではなく、この7ヶ月間で何をねらいとして、何を行ってきたかの発表である。高校3年生は『自分の人生を選択する力』が試される時期である。この時期にでも、各学年で行ったフィールドワーク同様、調査・研究・発表に取り組んでもらいたいという当初の望みがあった。この時期の調査研究は、たとえば生き方を探る調査、生き方に対する研究である。高校を卒業すれば数多くの選択肢がある。その中で自分の生き方にあったものは1つとは限らず、似たものは沢山あるはずである。それらを対比させて自分の生き方に適しているものを見つけてみることであればというねらいである。

なぜ大学なのか、なぜその学部なのか、専門学校では駄目なのか等を進路研究で意識させ〔自分の生き方を探る〕手段として自分史を作成することを卒業研究とした。

指導体制は、進路研究において担任6人の専門性を生かした分科会を発足した。生徒は関心のある分科会に参加し調査や情報交換を行い各分科会ごとに進行された。卒業研究においては、各学級で取り組み、指導者は担任副担任2名のチームワーク、ティーミングで指導にあたった。

自分史の作成は、将来ばかりを考えてしまうこの時期に、過去の自分から今の自分はどうか変わってきて将来につながるかとしているのかを改めて思い出し書き残していく事である。ただ進学就職だけしか考えない高校3年生ではなく、自分の生きてきた中でどのように進路を決めようとしているのか根本を考える時間として総合人間科の時間を使った。

卒業研究「自分史の中での進路」の発表は、発表者自身が生きてきた過程とこれからの生きていく方向を発表することで、将来の目標が意識化・自覚化されていくようなものとなった。発表後の先生の講評や同級生の質問意見は、人生を語り合うような場面がみられ今までにない形の授業となった。

## 3. 指導過程

### (1) 進路研究

- ① 大学・短大・専門学校・職場調査
- ② 大学・短大・専門学校・職場の訪問
- ③ 先輩・職業人の講話

本校での進路選択は高校2年の時点で理科系・文科系に応じた教科科目の選択をすることによりすでに始まっている。その状況のなか、総合人間科で進路について取り扱う場合に「学級活動の時間で済ませよう今までの進路指導以外に何が出来るか?」「進路は個人により多様多様、担任との個別面談による進路指導に頼る面が大きい、今までの進路指導以外に何が違うか?」などを考慮して、本校で今までに行っていなかった取り組みとして、先に上げた～の内容が提案され実施された。

〈第1回〉 4月15日

- ・総合人間科の取り組みについてのガイダンス；担任団より
- ・進路と職業についてのアンケート

〈第2回〉 5月6日

- ・担任団による進路別6分科会の発足
- ・各分科会での進路ガイダンス及び調査研究

学年担任団

高校3年A組 鈴木克彦(英語)・原 英俊(理科)

高校3年B組 横地 武(国語)・中村明彦(体育)

高校3年C組 福谷 敏(数学)・田中裕巳(社会)

分掌、教科、個性を生かしたティーミング、ティーミングを活用すべく、担任団6人の専門性をも生かした分科会を発足。その分科会でのフィールドワークについて事前事後指導を行う。

### 分科会〔系統別に“進路を考える”〕

第1分科会(人文科学系統)；指導者 横地 武 文学部、外国語学部、教育学部(教員養成以外)、人間科学部、外国語の専門学校など	30名
第2分科会(社会科学系統)；指導者 田中裕巳 法学部、経済学部、経営学部、商学部、社会学部、国際学部、社会福祉学部、ビジネスや福祉系の専門学校	22名
第3分科会(理学・工学系統)；指導者 原 英俊 理学部、工学部、情報科学部、鉱山学部、繊維学部、工学系の専門学校	17名
第4分科会(農学・医療看護系統)；指導者 福谷 敏 農学部、水産学部、医学部、獣医学部、薬学部、看護学校、衛生学部、医療技術、医療系の専門学校	28名

第5分科会（教員養成・家政・就職系統）；指導者 鈴木克彦 教育学部（教員養成）、家政学部、公務員、民間企業への就職希望者	24名
第6分科会（芸術・体育系統）；指導者 中村明彦 芸術学部、音楽学部、美術学部、体育学部、デザイン・ミュージック、美容専門学校	12名

生徒の関心のある学部の分科会へ振り分け、その学部でとんなことが学べるかを指導者からのアドハイス、さらに調査や情報交換が行われた。

〈第3回〉5月20日

- ・卒業生による講演「進路・職業選択についての体験談」を聞く

親の話ではなく、自分達と同じ環境に育った附属学校の先輩を招き、職業選択の動機・職業観・仕事の内容・生きかについて講演を聞いた。高校3年生として自分の進路についての考え力、自分の興味関心・適性などについて理解しようとする段階で、自分の進む方向を選択するにあたって、予想の誤りや認識の甘さなどはないか、実際に先輩方の体験を聞きながら、現実の姿や生き方について学んでいく。

講演者；昭和56年度卒 筑波人学出身 旅行会社勤務  
；昭和60年度卒 宮崎大学出身 パソコンソフト会社勤務  
；平成5年度卒 高等看護学校在学 病院勤務

〈第4回〉6月3日

- ・各自の進路希望に即したフィールドワーク（見学、訪問、調査）

生徒自身の将来設計や進路希望関係で訪問したい場所を選び、各個人で相手先と調整打ち合わせを行い、訪問調査して後日総合人間科の時間に発表するものであった。見学・訪問時間は、総合人間科の時間（土曜3時限～）を利用するか、相手先に都合により前日または後日に実施する場合もあった。

〈第5回〉6月17日

- ・訪問内容の検討、発表会（各分科会ごとに展開、発表時間は5分程度）
- ・質疑応答

## (2) 卒業研究

“自分史の中での進路”について以下の項目を例にレポートする。夏休み中に原稿を書き上げることを原則とする。原稿用紙は指定のもの。提出枚数は5枚（1枚800字）

- (1) 職業（進路）選択の動機
- (2) 自己の性格、能力、特技との関わり
- (3) 当面の自分の目標と計画

自分史作成上の留意点として、今日までとんな人生たったか振り返り、特に節目となる出来事を中心に

文章にしていく思い出せる印象的なことを、項目立てて書く事。この先どう生きていくのか、方向付けた何かが過去にあったとしたら、それを発見し、今の気持ちと一致するか考える事もできる。何をしようとして、これからどうしようというのか自分の軌跡を残す事。

〈第6回〉7月1日

- ・卒業研究；各自の取り組、自分史の下書き及び資料集め。〔資料1〕

〈第7回〉7月15日

- ・卒業研究 自分史への取り組
- ・2学期の「自分史と進路」の発表にむけての全体説明、および担任団による自分の職業選択の動機を模擬的に発表

〈第8／9回〉9月17日／9月30日

- ・卒業研究 自分史のまとめ
- ・スピーチ原稿の検討

〈第10/11回〉10月7日/10月26日

- ・卒業研究「自分史と進路」についてのスピーチ開始（発表を聞き要点をまとめ、批評を記入。感想を発表）

〈第12/13/14回〉11月2日/11月18日/12月7日

- ・卒業研究「自分史と進路」についてのスピーチ

〔資料1〕自分史作成メモ

⇒ 現在、自分の進路を決めようとする要因は過去のどこまでさかのぼって行くのだろうか。幼い頃に体験したこと、小中学校時代に見聞きしたことなどが、進路を決めるための基礎になっていることがあると思います。それをまとめながら、自分が何をしようとしているのか、再度自覚し、進路を決め、それに向かえるようにするのが、この自分史を書く目的です。これまでに総合人間科で行っていたことも踏まえて、自分史を書くための骨子を作ってください。

(1) 次にあげる時期、どんな体験が印象に残っていますか。また、それが何になりたいということに結びついたのであれば書いてみてください。

- ① 小学校以前
- ② 小学校時代
- ③ 中学校時代
- ④ 高校時代

(2) あなたは、身近な人（親、親戚、兄弟、先輩など）の生き方、職業から影響を受けていることはありませんか。

影響を受けた人物；

具体的な内容；

(3) 総合人間科で扱ってきたことはどのような影響を与えましたか。

- ① 分科会ごとで学部、学科、コースなどの説明を受けた感想はどのようなものでしたか。
- ② 先輩3氏の話聞いて感じたこと、職業観への影響はどのようなものでしたか。
- ③ 自分で大学、専門学校、会社を訪問した意義はなんだと思いますか。何か、進路決定、変更の要因になったことはありませんか。
- ④ 他人の訪問報告を聞いて自分の志望とどのように関連づけて、あるいは比較して聞くことができましたか。
- ⑤ 将来の夢

4. 生徒の取り組み状況と変容

(1) 「進路」についてのアンケート結果より

A：進学の理由は何か。

	男子	女子	全体
・資格を取得するため	10%	21%	17%
・就職に有利だから	8%	5%	6%
・教養や視野を拡大するため	20%	15%	17%
・専門知識や技術を習得するため	28%	28%	28%
・学生生活や課外活動を楽しむため	16%	8%	11%

- ・学歴がないと将来困りそうだから 8% 3% 5%
- ・このまま会社にでるのは不安だから 2% 3% 2%

B：生活スタイルで共感できるもの（複数回答）

	男子	女子	全体
・社会のために役立ちたい	38%	33%	35%
・社会的に偉くなりたい	9%	6%	7%
・自分のことは考えず企業の発展のためにつくしたい	1%	2%	2%
・経済的に豊かな生活を送りたい	55%	54%	54%
・楽しい生活をしたい	88%	88%	88%

- 自分の能力を試す生き方をしたい57% 65% 62%
- 別にこれという目的もなくのんきにやっていきたい  
13% 15% 14%
- 世の中に背を向けても自分なりに生きたい  
15% 10% 12%

C：進路決定、職業選択についての重要な要因は何か  
(複数回答)

• その職業の社会的意義	26%	22%	24%
• その職業の収入の高さ	36%	16%	24%
• 自分の能力、学力との関係	42%	46%	45%
• 自分の個性、性格との関係	63%	65%	64%
• 自分の興味、関心との関係	84%	77%	80%
• 親の意見	14%	16%	15%
• 身の回りにいる人の影響	18%	14%	15%
• テレビや映画の影響	24%	10%	15%
• 仕事が楽しそう	36%	21%	27%

「楽しい生活をしたい」が断然多かった。職業、仕事の上での楽しさ、家庭での楽しさ、地域での楽しさを追求する姿勢は大切と思われる。

進路選択の理由の大半は、職業そのものの「収入の高さ」や「社会的意義」からではなく、あくまでも、自分の「興味関心」「個性・性格」「能力・学力」との関係であることがわかった。

## (2) 先輩の体験談についての生徒の感想

○ 今回は3つの職種を聞いたが、やはり社会という場所は厳しいと思った。ほくは結構ツアーコンタクターに興味をもっていったか、今日の話を聞いて大変さがわかった。毎日の仕事は11時、12時はさらたし、自分で仕事をとらなければならぬ。ほくは、ツアーコンタクターは旅行へ行き、案内などをする人と思っていたが、それは大きな間違いだった。でも楽で儲けられる職場等、どこにもないので、なるべく、自分のやりたい仕事、自分の趣味に近い仕事を見つけて入りたいと思う。

○ 話を聞いて「自分の目標をもって大学を選ぶ」ということがよく分かった。最初のK氏は、大変な仕事だけど、凄くこの仕事が好きという気持ちが伝わってきた。I氏は趣味と仕事の両立をしながら頑張っていて、最後のSさんは、看護婦の魅力に取りつかれ寝る暇もないくらい大変な毎日を送っている。3人とも職業は違うけれど自分の仕事に誇りをもっていった。ほくも誇りを持てる仕事をしたいと思った。

( ) 先輩方はそれぞれ自分の意志でそれぞれの職に就いたことはよく分かった。特に、Sさんは立派と思った。立派というか本当に当然、自分の人生が変わってしまった人だと思う。僕もまた自分のことは

よく分からない。だけれども、わからないことは時が解決してくれることも多いことが話を聞いてみて分かったところだと思う。とにかく、まだ自分の行き先は一つ山を隔てた向こう側に隠れていると思うけれど、実際になんとか大学へ行って、それから色々やってみたいという気持ちも強く感じるし、思うことができた。この気持ちを大切に、これからは生きたいと思った。

○ 私は働きながら勉強したかったけれど、それはやめた方がいいことが分かった。自分の力をよく見極めて進路を決めようと思う。自分は本当に看護の方に進んでいいのか自信がなかったけれど、少しだけ自信が持てた。後はそれに向けて勉強するだけだと思う。

○ わたしたちはまだ職業を選ぶということがあまり分かっていないと思う。ツアーコンタクターに当たって私たちのイメージでは旅行の添乗をするだけなのだろうと思っていたのだけれど実際には、セールスやカウンターにも立ったりしなくてはいけないのたということが分かった。それに人には向き不向きがあるし、ただ、カッコいいとか楽しそうとか、そういう安易な考えではいけない。今回の先輩方の話でそういうことがよくわかった。

○ 大学などに行って本当に自分のやりたいことを探す。やりたい事と仕事は別。高校生の時からやりたいことを決める。色々な考えを聞かせてもらい参考になった。始めはそれとなく選んだ職業でもやり始めると良い所が見付けられるんたということが分かった。

## (3) フィールドワーク：進路希望に即した見学訪問の感想

○ 福祉施設を訪ねて

6月3日の総合人間科で、私は将来大学で学ぼうと思っている社会科学の参考にすの、社会福祉の現状を知りたいと、新栄にある社会福祉法人 衆善会乳児院を訪問した。

以前に身体障害者の介助ボランティアに参加した時にも感じたことだが、わが国における社会福祉は、たとえば施設の完備はもちろん、嘱託医師や栄養士による万全の健康管理やリースおむつ等による衛生管理に至るまで、地域ことにより充実したものになっていると改めて実感した。

また、時々行われる個別保育で家庭生活の疑似体験をすることによって、社会的なルールや習慣を身につけさせ、乳児院退所後、家庭に戻ったり養子縁組されてゆく子供達が新しい生活に戸惑うことのないようにする配慮もされている。

このような施設にいても普通の家庭にいても、長い長い人生をスタートしたばかりの赤ちゃんはこれから経験する楽しいことも苦しいことも、世の中の汚いことも、何も知らない小さな「人間」だと思う。たとえ両親から直接愛情を注がれなくてもまわりのさまざまな愛に助けられつつ、こうしてすくすくと自らの人生を歩み始めているのだ。私たちの後の時代を担う運命の彼らのために、わたしたちはいったい何をすべきで何が出来るのだろうか。

答えは今私にはまだわからないが、これから答えにより近いものを求めてもっともっと日本の福祉全般について学び、そして考え、さらに私たちの力で変えていくことが必要だと思います。

現実的なことで言えば、総合人間科の授業で「人間」の「人間」による「人間」のための「社会」の実現の為に、自分自身を見極め向上していくことが大切だといえるのではないのでしょうか。

#### ○ 名古屋大学農学部訪問

そこは名は知れども未知の領域だった。アポイントメントを取っておいた研究室は「生物材料機械学講座」と「動物遺伝制御学講座」の二つだった。

最初の訪れた「生物材料機械学講座」は農学部の中にあっても工学部に近い雰囲気です。周りにチェーンソー等が並んでいた。ここでは地球上にあって最も役に立つ『木材』を研究していた。木材は条件次第では鉄よりも強く、技術さえ有れば色々な形にも、また石油などの資源にもなりうることを話していただいた。また加工する際にいかに効率よく進めていくか等の研究もされていた。案内していただいた方に「農学部のイメージとは非常に違う講座でしょう」と言われたとき、それを否定できなかつたくらい工学、林学系に近いものだった。

その後「動物遺伝制御学講座」を見学させていただいた。ここはまったく農学部のイメージにそっていた。数百匹のネズミを飼っており、その中には他のネズミとは少し違う行動をしたり、色、外見の異なるのがいた。この講座では、交配をさせそれぞれの性質も持つ（つまり中間色を人工的に作ったりする）ネズミを生ませて研究したりしていた。この研究は一つの実験に長時間かかる、臭いがキツイなどの苦勞する点もあるそうだが、大変おもしろい研究をしていると感じた。

名古屋大学の農学部のほんの一部を見させていただいたわけだが、研究の内容は様々だけれどもそのどれもが興味深く、意義あることをしていたことに、とても感動した。

#### (4) スピーチ「自分史と進路」について：生徒の発表要旨の抜粋

- A：分岐点は受験であった。安易に進路先を決めて良いか迷っている。大学だったらどこでも良い。
- B：兄弟喧嘩が支えてくれた精神力。今までの人生の中で精神力を鍛えてくれた場面から今の自分の土台となっている。
- C：将来の夢、中学校までは学校の先生。高校からは、映画を観るのが好きになり映画を作りたいと思っている。
- D：親の考えで附属中に入学。親の考えに反発。父親との対立「この人には負けない」。父親の夢だった会計士をめざす。
- E：幼い頃は、絵を書いたり物を作ったり壊したりするのが好きだった。高校生になって振り返るといまは勉強ばかりで趣味がなくなっていることに気付く。自分が好きだったことを思い出し進路として建築家をめざす。
- F：小学校の先生が素晴らしく、楽しい活動をした。是非教育実習で附属に来たい。先生になるかはそれから決める。新聞記者希望。
- G：金持ちと結婚したい。安定した生活ができるから。
- H：中学校の先生に憧れて自分も先生になりたい。父は警察官で幼い頃は拳銃が撃てるから警官に憧れた。
- I：幼稚…消防士、小…サッカー選手、中…先生。理系文系選択が進路決定の岐路。

スピーチの中で、職業観の変化・進路選択への動機づけがあらわれるような内容を希望している。

スピーチの評価としては、国語表現の評価法を取り入れている。話し方についての評価、内容についての評価で全員が採点する。

このスピーチでは、発表者自身が生きてきた過程とこれからの生きていく方向を発表することで、将来の目標が意識化・自覚化されていくような感想を持った。

進路は、偏差値で決められるような現状。時間が無いことから、知識を得ることから逃げていて、進路について不安の固まりの年代である。

進路は、普通ほんやりとしていて親の意見・親戚の意見で左右される。

今回総合人間科の進路研究・卒業研究により知識が多少なりとも増え、色々な選択肢があることを知ったのではないかと。それは、総合人間科がなければイメージとしてしかない選択肢が授業によって沢山あることを知り、生徒にとってはそのことがどういう結果とし

てあらわれているのが課題である。

## 5. 今後の課題

高3の総合人間科「自立を求めて・進路を決める」の実践は、1月末をもって一応終了した。3月1日の卒業式を前にして、「進路」未定のものが各クラスとも半数以上いる段階では、総合人間科の実践の評価もしにくい。しかしながらこの実践自体の評価は、ある意味では永久に出来ないとも言える。一人一人の長期的な「生き方」に関わり、単に大学に何人入ったから、何人就職してきたからという数量化や近視眼的な評価は意味がない。この実践に意味があったかどうかは、生徒一人一人の長期的な「生き方」で実証されるものだろう。

最後に、この章では、この1年間の実践の中にすでに露呈している問題点を分析し、高校最終学年における進路指導、総合学習のあり方、限界等についての提言を行いたい。

### (1) 進路・職業に関するアンケート

複数回答であったので生徒一人一人の関心の広がりを知ることが出来た。具体的な進路・職業の決定の前に実施することは有効である（てきれば高2あたりで）。担任との個別的な進路相談の資料ともなる。また仲間の進路意識を知ることにもなる。

### (2) 進路別分科会

この分科会を通して、職業と大学の学部・学科・専門学校との関係の基礎的な情報を与えた。しかしながら、担任団の数（6人）だけの分科会では、生徒たちの多様な進路選択には対応できない面もあった。進路先の比較的似通った生徒たちが、進路観・職業観を話し合うことには意味があった。またこの分科会で大学・専門学校・職場訪問のフィールドワークの準備、結果の報告会を持ったが、個人差が大きく出た。夏休み前であったので、進路に迷いがあったり、まだ準備が出来ていない生徒にとっては無駄な時間になってしまった。ある程度進路が決まっている生徒たちは、この時間を積極的に利用して自主的に研究室を訪問したりして、「進路を決める」ことに活用してきた。前者の“学習の遅れからな生徒”に対して、この機会に進路先の研究者や学生、社会人をきめ細かに紹介して、教師や視以外の人からの“励まし”が与えられるような指導が必要であった。

### (3) 進路・職業選択についての体験談（先輩の話）

単に入学進学成功・失敗談としてではなく、現在の職業に至るまでの進路選択の話、職業の社会的意義

や誇りなどを話してくれた。3人の先輩だけで、もちろん限界はあったが、“先輩”ということで親しみがあったせいか、生徒たちは熱心に耳を傾けた。高1や高2の段階で同様な試みがなされてもよいし、先の大学や職場の訪問も、先輩を訪れるという方法で実施すれば、もっと効果があったかもしれない。

### (4) 自分史についてのスピーチ

これは自分史執筆に向けて、進路や職業との関係でハイライトとなる部分を3分程度、クラス全員の前でスピーチするという試みであった。「〇〇大学を受験する」ということを求められているわけではないし、どうしても話したくないことまで話す必要はないという条件で始められた。

3クラスとも全員がスピーチをし、その質もある程度満足の行くものが多かった。自己の内面を率直に語り、かなり自己分析の出来ているものが多かった。「国語表現」でのスピーチの手法が援用され、生徒たちは仲間のスピーチについてもメモを取り、3段階での評価も求められた。そのようなルーティン化されたスタイルの中では、“逃げられない”という側面があったのかもしれない。

スピーチは全員がやっても、次の「自分史と進路」はついに書けなかった、書かなかったという生徒がいることをどう考えたらよいであろうか。

### (5) 論文「自分史と進路」の執筆

自分史の執筆（400字詰め原稿用紙10枚）と文集としての発行は、4月当初から予告されていた。夏休み前の2回の総合人間科の授業は、クラス単位で自分史執筆のための準備作業に充てられた。本格的な受験体制に入る前、夏休み中に書き上げることか勧められた。そして締切の9月末を迎えたが、その時点で提出してきたものは全体の3分の2ほどであった。クラスごとにスピーチが始まり、全員がスピーチが12月に終了したか、結局10名弱の生徒はついに「自分史と進路」を書かずに卒業して行きそうである。書かなかったのか、書けなかったのか。

文集にするということにこだわっていたのかもしれない。スピーチだけでは後に何も残らない。だから喋っても、書くことは拒否した。自己の内面を公開し文字として残すことに抵抗した生徒。これは確実に存在している。これは“主体的に生きる”ことを目指す教育のパラドックスであるかもしれない。あえて“書かなかった”生徒。

しかし10名弱の“書かなかった”生徒のより多くは、作文嫌いの生徒であった。先輩の話や大学訪問のレポートも、数行しか書けない。文字表現へのアレル

ギーであり、本校教育がそういう生徒を作り出してきたのかもしれない。様々な学校行事の後で必ず作文が課される。それは中1から高3までの伝統であり、各学年とも作文は1年間に10回以上課されているのではないか。このような作文教育のなかで、文章表現のすぐれた、文章表現の好きな生徒も数多く育っている。その反面で、作文嫌いが作られていくとすれば、どうすればよいのであろうか。文章を“書けなかった”生徒。

もう一つ別の要因があるとすれば、担任の指導方法の差が出たということであろう。「自分史と進路」は1クラスが全員提出、他の2クラスはそれぞれ数名ずつ提出しなかった。スピーチ以降はクラス単位の授業展開となったので、このような結果になったのかもしれない。スピーチを時には進路別の分科会でやってみるとか、学年全体でやってみるとかして、3クラスの統一した指導で、全員提出を実現したかった。

### 「総合人間科の取り組みを終えて」生徒の感想

• 自分史なんて、たぶん一生に1度しか書かないだろうから、良い思い出になったと思います。自分のことを人前で話すのは、とても恥ずかしくて、最初はいやでした。でも、他の人の色々な進路や考え方について聴いているうちに、自分自身も沢山のことを考えさせられました。一番大切な、色々なことに悩んでいるこの時期に、こういう授業があったことは、いま思えばとても有意義だったと思います。あまり話したことがないクラスの友達についても、色々知ることができて良かったです。これから先、この授業で学んだことを思い出し、頑張りたいと思います。(山田知美)

• 自分のこれからのことについて、チラッと考えることはあっても、じっくり考えることはなかったので、総合人間科の授業はとても貴重な時間となった。他人の意見を聴くことで、人の多種多様な意見を知ることができ、社会を形成する人間の多様さを改めて実感した。それと同時に、自分という人間の存在をより自分自身で明確にできたように思う。

高3という人生の大きなポイントといえるときに、総合人間科は重要な役割をはたした。

これからの教育に、このような何かを追求する授業を取り入れることは、21世紀に向けての確実な前進につながると思う。(太田 愛)

• 様々な事を行ってきた、この総合人間科の本当の目的は何だったのだろうか。自分の心を打ち明けたい人もいれば、隠したい人もいるはず。それによりプ

ラスになった人、マイナスになった人。この取り組みに対しての考え方は人それぞれであり、良かったのか悪かったのかは、全体としてよくわからない。

自分個人の意見としては、受験にプラスになったとはあまり思えないが、こういう機会は、とても重要なもので、「書く・聞く・話す」という要素を含んだこの授業は良い行いだったと思います。

(水元孝幸)

• 私は、「自分史と進路」について、スピーチをしたとき、改めて自分の将来のことを考えた。それまでは、あまり自分の過去のことを考えたりすることはなかったので、とても良い機会でした。自分のことや将来のことを人に話すのは、少し抵抗があったけど、みんなの考え方がわかって、すごく自分にプラスになったように思います。受験とかにいらぬ授業なのですごく面倒だと思ったけれど、普通の授業では、学べないことを学んだ。(熊倉磨寿美)

• 他の学校にはないという総合人間科の授業は、私は結構好きでした。印象に残っているのは自分史を書いたこと。自分の人生を最初から振り返ることなんて今までした事がなく、書いているうちに深みにはまり、だんだん色々なことを思い出してきて面白かった。

自分探しができるというか、今の自分は過去の自分がいるから存在するんだなあと思った。

自分史の発表の時も、一人一人の話を聞くなんて事は普通ありえないけどこういう機会にみんなの話が聞けて、本当に面白くて自分の為にプラスになっていく話もありました。これから進路を決めていくにあたって、大切なことを気付かせてくれた授業であったと思います。自分史を書いた事によって得たもの私にとって、とても大きかった。これからも続けてほしい。自分と向き合う時間をもつことは大事であると、生徒の心に伝えてほしい。

(森藤ゆき)

• いまいち、自分の進路を決定できずにいた高3の1学期。この科で行きたい大学を見学について、詳しい話を聞くことができたことが、私にとって1番良かったと思う。なぜなら、それがきっかけとなって、真剣に進路を考えることができ、自分が本当に進みたい道を発見できたからである。

正直いうと、総合人間科が始まったばかりの頃、こんなのをやるなら少しでも早く帰らせてほしいと思っていたが、振り返ってみると、色々大切なことを学べたと思う。“人間科”という名前に似つかわ



しい時間だったのではないかと思った。

(河合利衣子)

- 最初は、この授業の意味が全く理解できなかった。これから受験生になっていく自分にとっては、土曜の3限にあえて残っていくよりも、早く帰りたいのが本音だった。でも、第1回から第6回のフィールドワークで自分の憧れていた出版の会社を訪れたことは、本当に良い経験だったように思われる。結局、それを機に出版への気持ちが冷めたというのが正直なところだけれど、自分の目で出版という仕事の現実を確かめられたのは、本当に良かったと思っている。次に行われた、自分史というのは、これまた正直言って厄介だった。夏休みの1番受験生している時にどうして?と思った。でも、驚いたことに、書き終えてみると今までで一番のびのびと書けた文章になったようで、やっぱり良い経験だったのだろう。

最後のスピーチは一番やってよかったと思う。自分のクラスにこれだけ進む方向の違う人が集まっていることが分かり、興味深かった。これからの自分の人生をきちんと考える場をもち続けられたので、本当に良かった。

(石川美樹)